

するならば、そばがいさめバ神もいさむる』とありますように特にかぐらぶとめは人間創造の理により、つとめ人衆が親神様にもたれ、呼吸を合わせてつとめるその心は、親神様の心と一つとなる陽気ぐらしへの一番のおつとめになります。かぐらぶとめは、よふきぶとめともいわれる所以がここにあるのであります。この肝心要の元の理を頂けるのは、かんろだいぶとめであり、かつとめ頂いたよろづたすけのおつとめなのであります。教会のおつとめも、ぢばの理を頂いているわけであり、同様の理が頂けるのです。おぢばのおつとめはご守護頂けるが、地方の教会のおつとめはご守護が頂けないという事はないのであります。全く同様の万人が救かる理を頂けるのでありますから、救からない訳がないのです。大きな悩みが解決しない訳がないのです。親神様が、ご苦勞にご苦勞を重ねて人間をお造り下された理を頂けるおつとめをすれば、必ず助かりの道へと導いて下さいます。しかしお

つとめをしていても、全く助からない、全然良くなつてこないと言う方もおられるかも知れません。これはまさに教祖が教えて下さった「このつとめで命の切り替えるのや、大切なつとめやで」とのお言葉であります。このつとめで命の切り替えが勝手に出来るのではないのであります。命の切り替えをするのやとお言葉通り、他のことを考えてただ手を振っているだけとか、早く終わらないかなと鳴り物をしていたり、またおつとめ中におしゃべりなどをしていような状態では、元の理のご守護は頂けないのであります。人間を造った親神様のご苦勞を少しでも頭に思い浮かべ、本日のおつとめをさせて頂いて、「本当に結構だ、有難いな」と感謝の心を持って、十全のご守護に感謝してつとめるからこそ、救かる理が頂けるのであります。

このことを考えますと、身上を頂いて月次祭がつとめられないと言う方もおられますけれども、大変勿体ないのであります。せっかく救かる理を頂けるのにこれを断つてしまふのは、大変勿体ないなと、いつも私は感じるのであります。おつとめとは命を頂戴する事なのであります。教祖の時代は人生50年の時代でありましたが、この頃すでに教祖は人間の寿命は115歳の寿命と言っておられました。つい数十年前まで、70歳まで生きられたら長生きの方でありました。しかし今はどうでしょう。たった数十年で115歳寿命に近づいているのであります。命を頂けるのなら苦しんで生きるより、病気になるよりも悩みがあるよりも、陽気ぐらしを目指し勇んで暮らせる方がいいのであります。おつとめを真剣につとめれば、このご守護を頂けるのであります。

おぢばでのかんろだいぶとめは、10人が十柱の神様になり、おつとめ下さいます。もしこれが1人足りなくて、9人でつとめたらどうでしょう。2人足りなくて、8人でつとめたならばどうでしょう。十柱の神様がいて人間が造られたのでありますから、当然おつとめの理は頂けないのであります。教会でつとめる月次祭も、やはり16人の手が揃うようにつとめられたなら、どれだけ親神様が喜んで下さりましょう。そしてどれだけおつとめの理によって、救かりの元を頂けるのか計り知れないのであります。しかしそうは言っても、簡単に月次祭の手は揃うものではないと思われ方も多いのではないのでしょうか。

以前こんな話を聞かせて頂きました。ある教会で毎月、熱心に月次祭へご参拝なされるご婦人がおられました。その婦人はご主人の仕事の都合で、教会からかなり離れたところへ引越すことになりました。これからはもう月次祭を参拝することが出来なくなる、そのご婦人は落ち込んでおられました。その家には神様が祀っておりましたので、所属の会長さんは、教会の月次祭の日の始まるその時間に、自宅から一緒に参拝をして月次祭をさせて頂くかと提案されました。それからその婦人は毎月教会の月次祭の日になると、普段ちゃんぽんをさされていたので、自宅の神様の前で坐りぶとめから12下り目までちゃんぽんをさされていたのであります。私はこの話を聞いて、なるほどと思わせなればどんな形にせよ、救かる種を頂けるのがおつとめなのであります。それぞれの教会でもおつとめの手が足りないというところもあるでしょう。遠方などの理由で来れない信者さんがおられるのであれば、当日の月次祭の役割表を前もって郵送しておき、教会に來れない信者さんの名札を作り、空いている鳴り物の場所やおてふりのところに名札を置いて、その信者さんには自宅でつとめて頂くといった丹精や、どうしても仕事や用事があり来れない方は、せめて祭典が10時に始まるのなら10時からその場で参拝だけでもして下さいとこういった丹精の仕方があってはならないのでしょうか。こういった理づくりが16人の手を揃える種になるのではないのでしょうか。

本日は元の理とおつとめに関するお話をして頂きましたが、本年1年共々に各教会における月次祭におきまして年12回ある月次祭ではなく、年に12回しかない月次祭を真剣に勇んでつとめさせて頂き、しっかりと元の理を頭に思い浮かべてこれから1年間おつとめをつとめて頂きますようお願いをして、1月の神殿の挨拶とさせていただきます。